琉游舎 Ryu Yu Sha Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 103号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3
2021年4月21日発行

晩春に降る雨

○晩春に降る雨は暖かく、少しけぶっているように感じます。もう冬にも戻ることのないこの時期の雨は、草木に優しく降り注ぎ、ひと雨ごとに穀物や野の草花の成長を助けます。

○4月20日から5月4日頃までを二十四節気では穀雨（こくう）と呼びます。穀物に実りをもたらす雨がしっとりと降り注ぎ、今まで乾燥していた空気も大地も一気に潤い、新芽や若葉はぐんぐん育っていきます。今年もタラの芽、タケノコ、山うどを美味しく頂きました。

○早春という言葉は頻繁に使われますが、晩春はそうでもなさそうです。春の訪れが待ち遠しいという気持ちが「早」に込められている一方、晩春は春が終ってしまう名残惜しさより、初夏が待ち遠しい気持ちが勝ってしまうからなのでしょうか。晩春に降る雨はあらゆる生きものの生命力を増進させる雨です。雑草が繁茂し、蛙も鳴きはじめ、蛇も姿を現す頃です。

○晩春というと小津安二郎監督の映画「晩春」を思い出します。再婚を決意したと偽って娘を嫁がせようとする父親（笠智衆）と娘（原節子）の愛情と心理が洗練されたタッチで描かれた古き良き時代の日本映画です。この晩春の後、日本は高度成長時代、盛夏を迎えます。

○盛夏の後には秋が来て落ち葉舞い散る晩秋がやって来ます。盛夏が生命力のピークとするならば、今の私たちの国の生命力は底に向かって滑り落ちでいるのでしょうか、それとも底をついて、また新たなピークに向かって駆け上がっていく途上なのでしょうか。

○このピークと底を何度も繰り返すことで人も社会もあらゆる生き物も生命力を維持し、更新していくのでしょう。私は会社員としての晩年を乗り切り、今還暦の後再誕して、３歳の春を迎えています。これからは永遠に届かないであろうピークに向かって春の盛りを終生楽しむだけなんだな、と夢想しながら、なぜかコロナ禍の第４波のグラフがバイオリズムの波動と似ていることを不謹慎にも発見してしまう晩春の雨の降る夜です。

4・5月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
26	27 読書会 13時半	28	29 映画会 お休み	30	5月1日	2
3	4	5	6 映画会 13時半	7	8 詩話会 13時半	9 写経会 13時半
10	11 読書会 13時半	12	13 映画会 13時半	14	15	16
17	18	19	20 映画会 13時半	21	22	23
24	25 読書会13時半 居酒屋の会16時半	26	27 映画会 13時半	28	29	30
			22 映画会 13時半	23	24	25 居酒屋の会 16時半

読書会13時半から
4月27日・5月11日・25日（火）
日蓮の「立正安国論」と消息文を読みます。テキストもすべてご用意。お気軽にどうぞ。

詩話会
5月8日（土）
13時半から

写経会
5月9日（日）
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から
4月29日の映画会はお休みです

居酒屋の会
4月25日（日）5月25日（火）
16時半から

狂言綺語…意思と実践

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

4年前の今頃、私は身延山で僧侶となるための最後の結界修行をしていました。春とはいえ朝晩の冷え込みが厳しい山の中、早朝4時過ぎの山道を雨の日も風の日も、毎日題目を唱え団扇太鼓をたたきながら素足に下駄ばきで20分の山道を上り本山久遠寺の朝勤に臨みます。小一時間の朝勤を終えるとまた山を下り祖廟（日蓮聖人の墓）参拝、道場で朝勤、８時になってやっと朝食です。この間は飲まず食わず、ただひたすら口から経文と題目を発出するばかり。修行で消耗したエネルギーを補給する食事も貴重な修行の一環です。私は毎食どんぶり一杯のご飯を食べていましたが、それでも35日間の修行を終えた時には５㌔もやせていました。

この35日間の修行の目的は法要式の実践方法と僧侶の威儀を身に纏うことです。これは学習の範疇ですので繰り返し行えば誰でも習得出来ます。しかし若い人達に混じって、当時59歳の私が寝食を含めた修行全体の流れについて行けるかは当初は不安でした。ところが３日もして日課に慣れてくると何をするにも大概いつも一番乗りとなっていたのです。元来押しつけられた規則や命令に対して拒絶反応を覚え、それを外に知られないように適当に凌いでやり過ごし今まで社会人をやって来た私には、これは驚くべき発見でした。頭で考えるよりも体が勝手にそちらの方に動いてしまうのです。どうやら私の行動は脳ではなく、意思が肉体を制御するらしいと言うことが分かりました。水行も、食事の用意も清掃も整列も、唯一の楽しみ入浴も当番を除けばほぼ一番乗り。特に水行は起床の鉦が鳴った瞬間に飛び起き一分後には頭から水を浴びていました。これがくせになるほど気持ちがよいのです。地下水を貯めた大きな水行プールから手桶で水を汲み、経文を唱えながら作法に則って10回ほど水をかぶります。僧衣に着替え道場で経を読む頃には体はポカポカと温まってきます。頭であれこれ考えれば厭なことつらいことで体は動かなくなります。しかし意思があれば体は勝手にその意思の方向につれて動いてくれます。おかげで、私は楽しく修行期間を過ごすことが出来ました。この「意思」は現在の私の日々の行いをありのままに動かす「信」と呼ぶべきものとなっています。

「自力」と「他力」という仏教用語があります。この言葉は対立概念のように思われています。例えば「仏教の究極の目的である悟りを得るために自己をよしとし，自分自身の素質や能力に頼る修行法を自力という。これに対し，自己を煩悩具足の凡夫とし自力を否定し自分以外の力，たとえば阿弥陀仏の誓願に帰依する実践を他力という」注１この様な解釈が一般的です。世間的には、親鸞が他力念仏の、道元が自力禅の究極の実践者と認識されているでしょう。果たしてそうでしょうか。私には自力と他力は相反する概念ではなく、表裏一体、或いは同一のものと観えます。仏教学者や宗門の教義から見ればおまえの言葉の定義はあまりに単純化し恣意的だという批判をあえて受ける覚悟で、「自力は私たち凡夫のはからい」「他力は仏のはからい」と定義したいと思います。親鸞はその自力と他力を厳しく峻別し、自力を徹底的に否定しました。親鸞の主張は“私たちはどうやっても煩悩から逃れることができないという人間実存への凝視の末に、凡夫（自力）に悲嘆、絶望し自力を完全に拒絶し、そこで初めて他力（仏）の光に包まれて救われる”と私は理解しています。私と仏とを厳しく相対化することから出発して最終的に仏の中に私を投げ入れることで救いが成就するのです。一方道元や日蓮は法華経の思想を根底にして、片や個人の主体的実践である禅を極め、片や今生きる娑婆こそ安らぎの処であると信じ社会変革の実践の道に進むという両極端を歩んで行きました。しかし二人とも根底には「凡仏一如」の思想があります。私たちは本来私自身が仏そのものだという考えです。ただ娑婆世界の現実相の中ではそれは分離され自覚することが難しいのです。つまり自力（凡夫）と他力（仏）が離ればなれになっているという認識です。それをもう一度合一ささせる行いを、道元は個人の場で、日蓮は社会の場で実践したということです。三人の祖師たちは意思（信）と実践（行い）方法が異なっていても、目指すところは仏との一体化、凡仏一如、娑婆即浄土です。それは他力と自力が合一するということです。自力と他力とを分けて語ることは、安らぎの処（浄土）へと導く為の手段、方便の言葉なのです。

三人の鎌倉時代の祖師たちの意思（信）と　実践（行い）を比較対照してみると、個の救済を究極まで追求した道元と親鸞の宗教は哲学的になっていくはずです。そこでは個人の主体的あり方と実存が問われるからです。一方日蓮は社会全体の救済と個の救済は同時であるという立場です。彼の宗教は必然的に社会変革の道を歩みます。彼らそれぞれの意思（信）を、今を生きる私たちは正しく受け継いでいるでしょうか。道元と親鸞の法灯を継ぐ者たちの寺院数は圧倒的な数で１位２位を占めています。注２日蓮の法灯を継ぐ宗教団体は日蓮宗を始めとして数多存在します。そこには多くの「意思を受け継ぐ者たち（僧侶）」がいるはずです。意思があれば、行いは必然のものです。私たち意思を継ぐ者たちが、触れて語って日々を分かち意思を共有する人たちの数を少しづつでも増やし続けること、それが実践（行い）です。その行いは念仏や題目を唱え座禅をすることではありません。今私が置かれている時代、社会環境、自然、そこで生きる私と私以外の人々との関係の中で、意思の示すままに実践することだけが唯一意思を継ぐ者たちの「信」と「行」です。

自分の意思が置かれている場所（琉游舎）で、意思が示すままに躊躇無く実践の日々を過ごす今の私の原点は、４年前の身延山での修行の一番乗りの経験にあると思っています。意思が行動の原動力であることの自覚です。それを宗教的に言うと「信」が「行い」を導くと言うことでしょう。ただ、信行、意思と実践と構えなくとも、ありのままの毎日が導く「行いたいことを行いたいままに行うこと」が安らぎの処への行いだと信じています。

琉游舎：戸井　出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp

注1：ネット「コトバンク」より　注２：宗教年鑑